三十七年
事務ノ大要

明治三十年四月

黒田伯爵時勢意見

早稲田大学図書館
文書27
D 45

時務鄙見

客年十月瞬州灣事件以來東洋ノ形勢頓ニ變シ歐洲諸國爭テ清國ニ要請スル所アリ清國之ニ抗スル能ハス僅ニ四五月ノ間北洋ノ門戸ヲ擧テ之ヲ列強ノ手ニ委スルニ至レリ今日ノ趨勢ヲ以テ之ヲ推スニ其我國ニ及ホス所ノ影響果シテ如何今ニ於テ講求ヲ盡サンハ恐クハ國家ノ安危ニ關スルニ至ラン因テ所見ヲ陳スル左ノ如シ

獨逸ハ宣教師虐殺ノ補償ノ名トシテ瞬州灣ヲ占領シテ清ニ迫リ遂ニ九十九箇年ノ期限ヲ以テ同

養浩堂藏書

灣ノ借地及山東省ニ於ケル鐵道鑛山ノ特權ヲ
得タリ尋テ露英佛ノ諸國モ亦清廷ニ向ヒ要請ス
ル所アリ露ハ旅順口及大連灣二十五箇年間ノ借與
并ニ滿洲鐵道布設ノ權ヲ得英ハ威海衛ニ於ケル
日本占領兵撤去ノ後二十五箇年ノ期限ヲ以テ
同地ノ占領ヲ許サレ佛ハ廣東ノ廣州灣ヲ以テ石炭
貯藏所トスルヲ得タリ此ノ如ク各所樞要ノ地ハ盡ク
他國ニ占據セラレ畿輔ノ重地復タ海軍ノ根據ヲ有
セサルニ至リ加之先年馬關條約ニ於テ重慶沙市
蘇州杭州四ヶ所通商ヲ增シ近來又福寧岳州

秦皇島ノ三ヶ所ヲ開キ長江一帶内地河川ニ外國船
舶通航ノ自由ヲ許シタルハ貿易ノ利權亦大ニ外人ニ
侵占セラルニ至リ堂々タル大國ヲ以テ猶ホ獨立自衛ノ
實ナキヲ免レス若シ夫レ清國ヲシテ自強有為ナラシ
メ我國ト東洋ニ對峙セシムヘキ東方ノ大局ヲ永ク安固ノ期
スヘシト雖今ハ其國ノ衰微此ニ至ル慨嘆ニ堪ヘサル者
アリ抑モ當初各國ノ彼土ニ事アルニ方リ之ヲ事前ニ
防遏制禦スルハ我國實勢實力ノ許サヽル所ニシテ固
ヨリ之ヲ如何トモスル能ハス說ク者アリ曰ク清國今時ノ狀態或ハ俄ニ
他國ノ力ニ賴ラサルヲ得ス事其レ日本ニアラン乃是レ又一機會ナリト
内亂ノ生スルニ至ラン若シ然ラハ其鎭壓ハ英露等遠國ノ能クスル所ニアラスシテ

惟宜シク深ク將来ニ警メ内ニ充實ニシテ以テ外ニ待ツ
ヲヤアルヘキノミ
各國ノ清國ニ於ルヤ其權力ノ均衡ヲ得ルニ汲々トシテ互ニ
相牽制スル所アリ清國内自ラ土崩瓦解ノ憂ヲ生スルニ
非サルヨリハ所謂支那分割ナルモノ亦容易ニ行ハレサルヘ
シト雖其萌微不振此ノ如キニ乘シ若シ各國共ニ手ヲ
下スニ至ラハ其亡滅瞬ヲ旋ラサルヘシ今清國ノ存亡ハ姑
ク之ヲ置キ目下ノ趨勢其影響ノ我國ニ及フ者果
シテ如何ナルヘキカ蓋シ露ノ一不凍港ヲ東方ニ得テ海
軍ノ根據地トセントス欲スルヤ久シ歴史ノ朝鮮及清國

ニ試ミタルモ志ヲ逞クスルヲ得ス然ルニ今旅順大連ノ良港
ヲ掌握シ帰シテ海軍ノ根據トシ且鐵道布設ノ權
利ヲモ併セ得タレハ之ヲ西比利鐵道ニ連絡シテ以テ運
送ノ便ニ供セントス聞ク西比利鐵道ハ明後年ヲ以テ全部
落成ス若シ今ニ年ヲ早クシテ明年中ニハ完成スヘシ
而シテ智多若クハ敖嫩ヨリ分岐シ呼倫貝爾白都訥ヲ
經テ吉林ニ至リ更ニ分岐シテ一ハ穆稜和索羅寧古塔ヲ
經浦塩斯德ニ至リ一ハ奉天牛莊ヲ經大連旅順ニ
至ル智多旅順間其里程凡ソ二千露里日本里程凡ソ五百里
ニ過キサレハ成功ノ期決シテ長年月ヲ要セサルヘシ其

金通ノ後ハ浦塩旅連南北ノ三港ト海陸相貫聯シ其勢實ニ侮リ易カラス倘シ能ク獨佛ト連合シ東洋ニ跋扈スルニ至ラハ縱令ヒ英ノ威海衛ト據ルアルモ啻ニ一隅ノ保障タルニ過キサルノミ思フテ此ニ至レハ我國ノ狀態ハ恰モ一大強國ノ封疆咫尺ノ地ニ現出シタルト同ク復タ曷ソ慨嘆ノ日ニアラサルヤ明ケシ

廿七八年役戰勝ノ後ニ於テ陸海軍ノ擴張ヲ殖産興業教育通信ノ事務ニ至リ諸般ノ經畫ヲ定メラレ年度ヲ趁フテ施行シ所謂戰後經營十箇年今尚進行中ニアリ是レ皆皇威ノ振張ヲ謀リ國運ノ興隆ヲ期スルニ非サルハナシ乃チ今後ノ時變ニ應スル所ノ道亦此ニ外ナラサルヘシ獨リ憂フル所ハ憲法實施以來日尚淺ク代議ノ選ニ當ル者必シモ時務ヲ知ルノ才ニアラス殊ニ愛國真心ノ士ヲ得難キハ朝野向概スル所ナリ日清戰爭ノ當時ニ在リテハ稍上下一致ノ狀ヲ呈セシモ雖爾來又舊態ニ復シ各政黨ノ趨向ハ政權爭奪ニアリ常ニ政府ノ財政ニ向ヒテ從違ヲ試ミ去就ヲ定メ唯私黨ノ便利是謀リ國家ノ大計ヲ度外視スルニ至ル今日前途ノ時勢將來所陳ノ如ク切迫ナラントスルニ際シ政黨ノ狀況此ノ如クニシテ其

甚シキヲ加ヘンカ戦後經營ノ須要トスル經費ハ議會ノ
從違ヒ因リ左右制肘セラルヽヲ免レスシテ當路者ノ
手足ヲ屢フルコト能ハサルモノ多カラン況ヤ將來時局
ノ變遷ヲ慮リ百年ノ長計ヲ立ルヽ方ニハ從前ノ經
畫ニ止ラスシテノ憤大ト費用ト勢ツ者アラントス斯ル國家
非常ノ時ニ當リ其須要トスル經費議會ノ左右スル所
トナルカ如キアラハ復タ常情常律ヲ以テ之ヲ待ツヿヲ宜
リ非常ノ英斷ヲ以テ議會ニ對シテ處スル所アルヘヽ
或ハ一時代議機關ノ運用ヲ停止スルモ亦已ムヲ得サ
ルナリ抑モ憲法政治ノ功用ヲ曠クセス漸次ニ政黨ノ樂

羽翼ヲ矯正シ議會ヲ操縱シテ國家ノ福利ヲ進ムルハ政
事家ノ力ヲ盡スヘキ所ナリト雖外來擁勢ノ如何ヲ問リ
國家ノ安危ニ關スルニ至テハ遂ニ倒行逆施ノ措置ニ出
サハヲ得カルモ亦勢ノ免レサル所ナリ我國臣民ノ忠愛情ニ
厚キ國家多難ノ時ニ際シテハ上下一致シ外其侮ヲ禦ノ國民ノ特性ニシテ既ニ日清戰爭ノ當時ニ
觀ル所ナリ其片後ニ於ルヤ亦當ニ之ニ異ナラサルヘシ本文述ル所ハ政黨今日
ノ弊ヲ推シテ他日ノ萬一ニ處スルノ道ヲ論スルニ過キサルナリ讀者
之ヲ諒セヨ

東洋風雲ノ變態ハ向後如何ノ轉動ヲナスヘキヤ未
タ一定ノ推測ヲ下シ易カラス且歐洲各國ノ東洋政畧
汲々タル今日ニ當リ外交ノ事務ハ慎重ニ慎重ヲ加ヘ
細心事ヲ處シ輕易事ヲ言ハヘカラサルハ勿論ナリト雖

未而綱纜ノ計亦預メ講セサル可ラス故ニ國家財計ノ許ス限リ現下施行ノ經營ニ一歩ヲ進メ或ハ海軍艦艦ノ完整尚歳月ヲ要シ事變ニ際シ全國防備ノ用ニ敷クニ足ラストセハ水雷驅逐艇及水雷艇ノ設置ヲ多クシ以テ急需ニ充ルカ如キ或ハ各要衝ニ望樓ヲ增置スルカ如キ或ハ縱貫鉄道ノ增築及襲線ノ布設ヲ速ニスルカ如キ此等緊急ノ事業豈ニ一日モ忽ニス可ンヤ願クハ上下一致恰モ敵國外患ノ旦夕ニ迫ルカ如キ想ヒヲ為シ協同シテ以テ持國ノ謀謨ニ效ヒタランコトヲ以上區々ノ意見偏ニ近日ノ時變ニ顧ミ默視ス能ハス聊カ所感ヲ述ヘ之ニ識者ニ質サントス尚ホ我言ヲ誤テ一ノ杞憂ニ過キサラシメハ實ニ國家ノ至幸ナリ

明治三十一年四月

伯爵 黑田清隆

三十年五月八日午下六時過ぎ黒田侯爵より
御使を以て本編を
拝借仰せ付けられ謹て受取り
御使を以て只今ロンドンに於ける公使
より公報内に山縣中将
辞職の報あり
三十年五月八日午下三時　清隆拝
宮島雅元殿

日午後時過使を以て本編
抜粋仰付られ謹て受取り
御使を以て清隆拝
三十年五月八日午下
宮島雅元殿

十月六日午前零時四十分

北京特發

清水政府より偏數を於て

償金請濟を貴国通知あり

文部政府其方に威而鄭

信し濟

支那政府意味佛之一要求を

實行せり

二伸 貴方前書ニ宜敷申
上候
扨書状堂ニ寄稿ニ而山ヶ谷
ヶ祝儀献物ニ付前年義兄ニ
宜敷申入候ニ付貴方之宜敷
明治三十年十月十日 養浩堂ニ於テ
誠斎 [illegible]

養浩堂